

戦中の思い出



長久手市前熊下田
與語 麦生さん

昭和十六年十二月八日、小生が長久手国民学校初等科二年生のとき、太平洋戦争が始まった。その頃は、あまり身近に戦争の怖さが分からなかった。小学校四、五年生の頃、村の小学校の校舎に兵隊さんが常駐するようになり、将校さんたちが乗る馬の飼料にするため、草刈りを手伝った記憶がある。また、男子児童は、二本の青竹を使って桑の木の皮を剥ぎ、それを竹竿に干してから学校に行ったものだ。桑の木の皮は、長いもので数メートルもあった。乾燥させて加工すると丈夫な繊維になるので、兵隊さんの軍服にするとか聞いていた。

食糧を確保するために、小学校の校庭を掘り返して芋畑にしたり、色金山の北法面を開墾して、さつま芋を作ったりした。大草の権道寺の山から防空壕の材料になる松の木も切ったりした。当時は未舗装で埃を上げて何本も学校に運んだ。小学校の校庭に防空壕を作ることが優先され、とにかく学業はそっちのけだった。しかし、大勢で仕事するのは楽しかった。

小学校高学年になると三ヶ峯の県有林で野うさぎ狩りをした。山の麓に長い網を張り、大勢で一列になって、大声で山の裾から谷間に向かって追い出していく。一度に五、六匹は捕ることができた。捕獲したうさぎを学校に持ち帰り、皆でうさぎ汁を作った。もともと、我々児童のうさぎ汁には、汁だけで肉は入っていなかった記憶がある。また、登校前には、地元の神社に兵隊さんの武運長久を願って軍歌を唄い、男女ともに日参した事も思い出す。

戦時中、我が長久手村においても、大勢の兵隊さんたちが野戦訓練のために村内の民家に寄宿した。長湫のある地主さん宅に将校級の兵隊さんが泊まり、軍馬が繋がれたクロガネモチの木、通称フクラシバの大木をかじった傷跡が戦後七十年たった今でも現存している。

終戦間近の昭和二十年三月末、名古屋市営地下鉄車庫、現在の丸山住宅付近に B 29 爆撃機



が墜落したと聞いたので、自転車で見に行った。爆撃機の車輪の大きさに驚いた。爆弾を積んだまま、高射砲で撃たれ落ちたようであった。

終戦直前には、中根原の田んぼに二か所、琵琶ヶ池に一か所、B 29 爆撃機の爆弾が落とされた。当時の大人たちの話では、米軍が帰り際に機体を軽くするため、何も無いところに爆弾を落としたのではないかとのことだった。

小生が国民学校初等科六年生のときに終戦を迎えた。ところが、学生時代に想い出づくりに欠かせない修学旅行が、終戦のごたごたで中止になってしまい、齢八十余年過ぎた今でも残念でならない。戦争は、二度と繰り返さないことを願う。

現在の想い

與語 麦生さん

今後の活動については一番の趣旨は平和。このまま平和が続いてくれれば一番いい。若い人に言いたい事は、もちろん体験者ではないですし、戦後七十年も経っているのに、関心が無いかもしれないけれど、広島原爆、そしてそこからの現状(復興)をみんなに見てもらい、平和がどのくらい達成しているのかという事を感じてもらいたいと思います。

語り部としては、とにかくもう戦争体験者が八十代から九十代の人が多いので、難しい問題かもしれないが、若い人にどう伝えていけば良いのかを考え、そして何より、関心を持ってもらわなければいけない。いま日本は平和すぎる。身近では自分の息子や孫でも、戦争があったという事を知らない。戦争体験者は運が悪かったというだけの事で、過去のものとして片付けてしまう。少しずつでも事実を伝えていかなければいけないと思う。